第１０２号

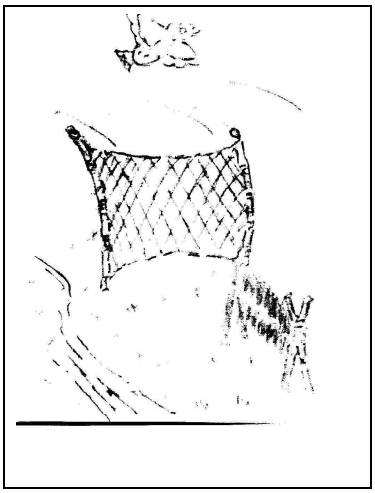
芥川だより

発行日＊＊＊2015年７月１日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明
発行所
☆ 着物から服へ
着物から服を仕立てます
高槻市芥川町2 －１４－3
TELO７２－６８１－８８７０

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部50円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

ＴＰＰ特集　　一網打尽のワナ



秋、雀が田んぼの稲穂にむらがり追い立てても逃げない。せっかく苦労して刈り取った稲穂を群れなして食いに来る。雀の群れは近くの竹やぶを寝床にしていた。兄は雀を捕るためにカスミ網を買ってきた。すばしこい雀は、昼間は飛び回りとらえられない。雀は夕方になると寝床の竹やぶに帰り早朝に飛び立つ。その時をねらったのである。網の両端に竹竿をくくりつけ竹やぶの近くに立てかけた。竹やぶは、蚊の住み家でもある。大きな蚊が容赦なく刺しに来る。

子供ふたりの力では長い竹竿は立てかけられない。高く茂った竹の半分にもとどかない高さであったが、何とか立てかけた。早朝、ふたりは期待して見に行ったが、一羽もかかっていなかった。もっと高く広くワナをかけないと捕れないのだ。結局、一度きりのカスミ網になってしまった。

今、問題になっているＴＰＰもカスミ網に似ている。個々の企業が飛び回って儲けを横取り出来ないようにカスミ網のように一網打尽に法の規制をかけてしまうやり方である。アメリカの大企業だけが独り占めしようとする魂胆である。この法律は、カスミ網のように細い糸で編まれた弱い網ではない。どうあがいても逃げられない先の先まで縛られる条約である。

敗戦国が勝戦国と交わす条約にも劣らぬ一方的に不利なものである。だから、条約内容が公開されない。どうしてこんな事をアメリカは押し付けてくるのか。アメリカも切羽詰まっているのだろう。どうしても日本の金と優秀な労働力をひっくるめて先々まで頂こうという作戦らしい。後戻りできない国家的なワナをアメリカは仕掛けようとしている。日本人でなくても普通のアメリカ人でも、こんな条約には反対するに決まっている。ほんとうにごく一部のとんでもない人の想いつきなのだが、成立したら多くのアメリカ人も日本人も奴隷化して国際的な大企業の餌食になってしまう。むかしのカスミ網のような悠長な話ではない。

死をめぐるあれやこれ(12)

国民に牙をむく安倍政権

石川　吾郎

理論的にも破綻してしまって、明確に憲法違反の安保法案に、これほどまで安倍政権が固執するのはなぜだろう。これは背後の米国からの圧力がいかに強烈であるかを物語っている。戦争を続けるには財政的にもたなくなった米国は、日本にその肩代わりを求めている。しかもその戦争たるや米国の巨大企業が自らの利益を確保するために大統領を動かして始めるという構造になっているのだ。しかもこの圧力を掛けているのはノーベル平和賞の、腐りきったオバマ政権に他ならない。一方の日本では、孫崎氏によると戦後の日本史では米国追従政権と自主路線政権があり、自主路線は（米国とその手先の国内勢力に）常につぶされてきたという（注）。安倍氏は自らの保身のためにも究極の対米追従路線を突っ走る。これはこの問題だけではなく安倍政権がめざすＴＰＰでも同じ。売国的で憲法違反のＩＳＤ条項を含むＴＰＰでは、国としての自己決定権を奪い、日本の市場全般を米国のグローバル企業の餌食として差し出す。その結果、国民の生活水準は発展途上国水準に引き下げられ生活の破壊が進行することになってしまう。これは人件費を引き下げなければ国際競争力がなくなるという欺瞞の「大義名分」からだ。ＴＰＰはマスト(不可欠)だと楽天の三木谷社長がかつて語ったそうだが、彼は国民の九十九％を犠牲にしてグローバル企業をめざす一％の側の人物なのだ。そういえば楽天社内の公用語は英語だそうな。

（注）孫崎享『戦後史の正体』（創元社）。またこの人および堤未果氏の出るユーチューブの動画はじっくり見る価値があり勉強になります。ぜひおすすめします。

芥川だより　一〇二号

目次

巻頭エッセイ　下村嘉明　1
巻頭コラム　石川吾郎　1
◆ＴＰＰ特集
みんなで知ろう日本の危機（1）　伊藤明　…2
ＴＰＰの是非　土田裕　…4
我々は七面鳥か　下村嘉明…5
おっちょこチョイぼけ　28　ＡＯ　6
素老人・よもだ帳　16　坂本一光　7
闘病記　28　梵店主　9
世界一周旅行記　14　若山哲郎　10
大人の今昔物語　12　石川吾郎　11
哲学屋のつぶやき　13　祖蔵哲　12
サラリーマン渡世譚　26　明石幸次郎　15
年中行事という言葉　大江雉兎　16
編集後記　嘉　17
女90年の軌跡　眞糀　18
俳句　土田裕　18

ページ

みんなで知ろう日本の危機（1）

伊藤　明

はじめに

最近の安倍政権のやることを見るにつけ知るにつけ、また安倍氏の傲慢不遜・不誠実な発言や行動に対して、疑問や怒りを感じておられる方が多いのではないかと思います。私もその一人です。私は一介の町の精神科医で、政府に対して批判的な気分をもち、安倍政権のあまりに強権的なやり方に嫌悪感を抱いているものの、このようなテーマの文を書く立場ではないとも感じていました。しかしあるきっかけから堤未果さんの著書『沈みゆく大国アメリカ』を読んで大きな刺激を受けました。それから関連の幾冊かの本を読み、これまで感じ続けていた**「日本の社会が善くなるどころか、かえって悪くなっていくのはなぜか」**という疑問に対してぼんやりと理解ができる気がしましたので、この文章をつづって皆さんの参考にして頂きたいと思ったのでした。

安倍政権の目指すもの

安倍政権のすること・しようとすることを考えてみると、憲法違反の安保法案を強行（世界のどこでへでも自衛隊を派遣し戦争に参加できるようにする）、ＴＰＰの秘密交渉推進（日本の社会全体をグローバル大企業の儲けのための市場にしてしまう。とりわけ皆保険制度の崩壊へ導くなど）、辺野古基地移設問題、原発推進、格差拡大の政策（労働者派遣法改悪など雇用環境の改悪、消費税増税・法人税減税、医療自己負担の増大など）、マスコミへの干渉（自民党の放送関係者の呼び出し、マスコミへの圧力など）、教育の反動化（企業にとって使いやすい人材の養成に特化していく）などなど、考えてみれば安倍政権のやっていることは、庶民にとっておよそプラスになる政策はほとんどありません。ただ大企業が儲けやすい環境を整える。そのおこぼれがやがては下々の庶民までまわるだろうという「おこぼれ経済論（トリクルダウン理論とも言われる）」だけです。ところがこの「おこぼれ」も実はほとんど成り立つものではないのです。というのは現代の企業は儲かればその利益を株主の配当に回すのであって、従業員の給料はできるだけ低く抑えることが利益を大きくする方法です。だからこそ日本の企業も人件費の安い東南アジアや中国などで生産をするようになるのです。こう考えると安倍政権が、だれの利益を代表しているのかははっきりしています。それは国民の大部分のためではなく、米日のグローバル大企業の利益を代表しているのです。

それにくわえて安倍政権の戦略を支えるのは「国民は愚かで単純である」という哲学であると思われます（古賀氏による）。具体的には国民は、

(1) ものすごく怒っていても時間が経てば忘れる。
(2) 他にテーマを与えれば気がそれる。
(3) 嘘でも繰り返し断定口調で叫べば信じてしまう。

という認識の上にたって政治に当たっています（確信犯的にこれを使い続けていることから明か）。ここから最初に書いた「安倍氏の傲慢不遜・不誠実な発言や行動」が説明できます。

ではなぜこのような政権が選挙で成立してしまったのか。それにはいくつも要因があると思われますが、一つは選挙制度。前回（去年十二月）の衆議院選挙では、与党の比例区では有権者の四分の一に満たない数しか獲得していないのに、議会では三分の二を超える議席を獲得して、この結果現実には有権者の四分の一以下にしか信任されていないのに、現在のような数を頼みにした横暴を繰り返しているのです。現在の小選挙区・比例代表制度を推進した自民党などのもくろみが、このような状況を作り出すことにあったことは明かです。そして、もう一つの大きな要因としては、権力によるマスコミの操作が大きく影響しています。ここではまず、このマスコミについて取り上げましょう。

マスコミの問題

近頃の新聞やテレビのマスコミが十分な政府批判をしなくなっていることに気づいておられる方は多いと思います。国民に対してきわめて重要な情報を伝えず隠している。政府に都合のよい情報を流し政府の宣伝の役割を果たしている。この結果国民に正しい判断をさせなくしている、とも言えるでしょう。さらには全国ネットのテレビでは、馬鹿馬鹿しく可笑しいバラエティかスポーツ中継の番組で国民の目を政治からそらす。選挙となれば論点をかわし国民を欺く政局化を行う（たとえば小泉内閣の郵政民営化の是非といったこと）。しかもこういったテクニックは広告代理店が関与して、非常に洗練をされ巧妙になっているのです。こ

のように、日本のマスコミは国民の側に立って政府を批判するという、その本来の役割を果たさなくなっています。

日本の報道については、国際ジャーナリスト組織「国境なき記者団」が発表した「世界報道の自由度ランキング二〇一五」によると、日本は世界百八十カ国のうちで第六十一位(前年より二位ダウン)という低さなのだそうです（韓国・台湾より低い）。

さらに公共放送であるＮＨＫの偏向ぶりは目にあまるものがあります。まさに政府寄りで政府に都合のよい情報を選りすぐっているように見えます。民間、たとえば「読売」は、政府の御用報道で有名ですが、国民から料金を強制的に徴収しているＮＨＫの罪は大きいと言えます。ＮＨＫの会長に「政府が右といったことを左とは言えない」とか「日本政府と懸け離れたものであってはならない」といった発言を臆面もなくするような人物を据えてから、よりひどくなっているのは明かです。

さらにＮＨＫの偏向は天皇陛下の発言の最重要部分を削除して正しく伝えない、というところまで来ています。これは、二〇一三年十二月天皇陛下が八十歳の傘寿を迎えられ「お言葉」を発表されたのですが、ＮＨＫのニュースでは何と、このメッセージの核心となる以下の部分を削除してしまって報道しなかったのです。

『戦後、連合国軍の占領下にあった日本は、平和と民主主義を、守るべき大切なものとして、日本国憲法を作り、様々な改革を行って、今日の日本を築きました。戦争で荒廃した国土を立て直し、かつ、改善していくために当時の我が国の人々の払った努力に対し、深い感謝の気持ちを抱いています。また、当時の知日派の米国人の協力も忘れてはならないことと思います。』

ここには、現状の平和と民主主義、そして憲法を「守るべき大切なもの」とした護憲発言であり、さらには憲法を作った主語を「日本」とし「知日派の米国人の協力も忘れてはならない」と加えるなど、「連合国からの押しつけ憲法論」への反論ともとれる発言だった。」（和田実氏による指摘）

今の天皇は、機会のあるごとに日本の不戦・平和を願い、憲法を守ることの大切さを発信しておられる、きわめて良心的・尊敬すべき方だと思いますが、その「お言葉」を公共放送であるＮＨＫが、明かに「意図的に、わざと」削除して国民に伝えなかったのです。これはこの「お言葉」が政府の憲法無視・戦争志向の方向からすると都合が悪いからだったと思われます。そしてその後もこれに類したことを続けているのです（ただ報道の現場には、良心的な職員がいるだろうことは忘れてはなりませんが）。

ＴＰＰは日本社会を根底から壊し、国民の生活を破壊する

現在の時点（二〇一五年六月下旬）では、政府の提出する安保法制案（戦争法案）が憲法違反だという世論がようやく盛り上がりを見せてきて、マスコミ上でも憲法違反を示唆する方向の内容がみられるようになってきました。国民的な運動によって、これを廃案に追い込むことは絶対に必要です。しかしこの安保法制案にまさるとも劣らぬほど日本社会に大きな打撃を与え、国民の生活をレベルを大きく引き下げる可能性をもつ、とんでもない代物が「**ＴＰＰ**（環太平洋戦略的経済連携協定）」なのです。このＴＰＰの危険性について、日本のマスコミは警鐘を鳴らそうとせず、まともに触れようともしていない。このことは、日本のマスコミの自殺行為だと思われます。ＴＰＰは日本社会が直面しているもっとも重大な危機なのです。

ＴＰＰのもっとも大きな問題点は、これに必ず含まれる**ＩＳＤ条項**というもので、これは日本の国から独立・自己決定権を奪う**憲法違反の条項**なのです。詳しくは後の回で述べることになりますが、ここではカナダで起こったＩＳＤ条項についての信じられないような一例を紹介します。

ＴＰＰと同様のＩＳＤ条項を含む北米自由貿易協定(ＮＡＦＴＡ)をアメリカと締結しているカナダは、子供の知能低下の問題があることから、ガソリン添加物としてマンガンを禁止しました。この規制に対して、米国の会社がカナダ政府をＩＳＤ条項を根拠にして、この規制が投資家に対して損害を与えていると国際投資裁判所に提訴して勝訴をしてしまったのです。その結果、**カナダ政府は何と、米国のその会社に巨額の賠償金を支払い、その上にこの規制を撤廃することになってしまった！**のです。いい変えれば、カナダ政府はＩＳＤ条項を結んだばかりに、国民の健康を犠牲にして米国の会社に巨額の貢ぎ物を差し出すという、極めて不条理かつ屈辱的なことを強制されてしまったのです。

これに類した深刻な事例は、ＩＳＤ条項を含む自由貿易協定を結んだメキシコなど北米各国や韓国との間で起こっているのです。そして国際投資裁判所は米国に圧倒的に有利にできており、**米国の勝率は一〇〇％**だそうです。

自国の国内の各種の規制などは本来その国の主権の範囲であり、まさに国が独立しているということの内容であるわけですが、それがＩＳＤ条項によって犯されることになってしまう。こんな馬鹿げたことはありません。まさに投資家や資本家の利益のために、自国の国民を犠牲としてさしだすという、**言葉の真の意味で売国的であるのがＩＳＤ条項**の内容なのです。こんな不条理な内容のＩＳＤ条項を含むＴＰＰを、我が国の政府はその内容を国民に知らせずに、ごり押しに交渉・締結しようとしているのです。驚くべきことに、わが国の主要な五大新聞のすべてが、その社説においてＴＰＰの推進に賛成を説いているのです。

ここにまさに、日本社会の政治の状況の

危機的な状態が端的に現れていると思うのです。

よびかけ

では私たちはどうすればよいでしょうか。まず正しい事実を知ることがきわめて大切です。新聞やテレビのニュースに関心をもつことは大切ですが、必ずしも事実が正しく報道されているとはかぎらず、ゆがめられていることも多い。隠されているものも多くあります。複数のメディア報道を比較することも必要になります。

しかしネットの動画投稿サイトユーチューブにあげられている動画には、良心的でマスコミには乗らない貴重な情報を伝えているものが意外にたくさんあります（むろん玉石混淆なのですが）。この文章を読まれてきた方々に私がおすすめするのは、そういった動画の中で、ジャーナリスト・**堤未果『政府は必ずウソをつく』**（三〇分程度）という動画です。ぜひこれを観てください。この中で伝えられることは衝撃的で、ＴＰＰについてもその問題点を適切に伝えていると思います。内容が豊富なのでできれば幾度かメモをとりながら観ていただくのがよいと思います。とくにＩＳＤ条項とともに、政府とグローバル企業の究極的な癒着とされる「コーポラティズム」という言葉は今後のキーワードになってくるとみられます。

さらにこの動画を周囲の方々と一緒に観ていただき、意見を交換するなどの勉強会を開いていただき、ぜひこの**ＴＰＰの危険性を周囲の皆さんに広めていってもらいたい**と、切にお願いしたいと思っています。そうして**米日のグローバル企業に、日本国民の大部分を餌食として差し出すことに等しいＴＰＰの締結を阻止していこうではありませんか。**

《参考》

堤未果さんの出ているユーチューブの動画はいくつもあり、どれもわかりやすく鋭い分析をしておられるので、おすすめです。そのほかに彼女の書いた本とくに『沈みゆく大国アメリカ　逃げ切れ！日本の医療』（集英社新書）、『政府は必ず嘘をつく』（角川ＳＳＣ新書）なども読んでいただくといいと思います。そのほかに、動画としては、孫崎享（うける）氏、内田樹（たつる）氏、古賀茂明氏、などの出る動画も参考になります。

またブログでは、「植草一秀の『知られざる真実』」が日本の危機に、鋭い指摘をされていて参考になります。さらにこれらの方々の著書は、日本の現状を考える上で非常に参考になります。また「考えてみようＴＰＰのこと」のホームページも参考になります。

さらに「日本医師会のホームページ」（ホームページからＴＰＰで検索）ではＴＰＰに反対する日本医師会の考えを知ることができます。

本としては、堤未果氏の著作の他に、古賀茂明『国家の暴走』（角川書店）、内田樹『憲法の「空語」を充たすために』などがおすすめです。

《付記》

ここまで書いてきて、新しいニュースが飛び込んできた。自民党議員の勉強会で**自民党の国会議員**が「マスコミを懲らしめるには広告料収入がなくなるのが一番。経団連に働きかけて欲しい」「悪影響を与えている番組を発表し、そのスポンサーを列挙すればいい」などと発言していた。また当日講師として招かれていた前ＮＨＫ経営委員の百田某が「沖縄の二つの新聞社は潰さないといけない」「米兵が犯したレイプ犯罪よりも、沖縄県全体で沖縄人自身が起こしたレイプ犯罪の方が、はるかに率が高い」などと発言していたことが明かになり、衆院特別委員会で百田某の話を聞いた感想を求められた加藤勝信官房副長官は「大変拝聴に値すると思った」と答えた。また安倍首相は「事実とすれば大変遺憾」と述べたのみで、「言論の自由」だなどと言い放った。まったくこれは民主主義社会の国会での出来事とは思えない。「異論者にどう報復するか」を公然と語る自民党は、今や全体主義国家の党に他ならない。このような独裁志向の者たちに政治に当たらせてはいけない。国民の力をあわせて、一刻も早く彼らを政権から追い落とすことが必要である。

ＴＰＰの是非

土田　裕

ＴＰＰとは関税、非関税障壁の撤廃を目指した多国間協定であるが、現在、交渉されている協定の詳細については必ずしも全てが明らかになっているとは云えない。詳細を承知していない人間が賛成、反対をいうのは僭越と思うが、長年、貿易に携わっていた経験から私見を述べてみたい。

米国に駐在していた一九七八年から一九八四年、すでに日米ともに工業製品については略、全面的に自由化され、関税も一〇％以内に抑えられており、六〇年代半ばから頻発した日米貿易摩擦の問題は沈静化していた。七〇年代初頭に起こった日米繊維協定、日本製鉄鋼、自動車に対するアンチダンピング課税問題などは，半分以上日本側に責任があると思う。当時の日本は輸出立国を標榜しており、輸出優遇税制があった（詳細は忘れたが輸出で稼いだ利益については税金が安かった）。日本メーカーも輸出については特別価格を出すのが一般的で、物にもよるが国内卸売価格の半値などは当たり前であった。それも米国メーカーとの競争ではなく日本の競合メーカーに勝つためであった。その後、貿易摩擦を避けるためと、為替の変動に翻弄されない為、自動車を始め殆どの大手メーカーはア

メリカに工場進出したので、今や米国で売られている日本製品の半分以上は米国産だと思う。当時、シアーズを始め米国の小売大手は日本の商社、メーカーを競争させ、最も安いところから仕入れるのが一般的で、軽工業製品（繊維、おもちゃ、自転車など）は後進国に押され日本が競争力をなくした途端、全て台湾、中国などに切り替えられてしまった。

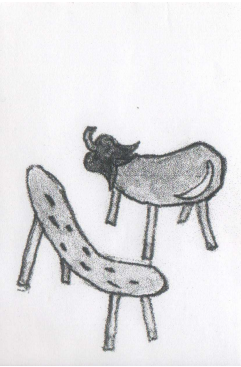
米国のメーカーは輸出（日本の輸入）といえども米国の国内価格と同じ価格表を提示してきて値引きには殆ど応じないのが通例であった。当時から米国から日本への工業製品輸出といえば日本メーカーが作っていない大型コンピュータ、医療機器、コカコーラ等が中心で（私が担当していたボーリング機器も日本製はなかった）米国製自動車などは米国メーカーが日本の仕様に変更もせず、価格も高いので殆ど売れず、この状況は今も変わっていない。私が駐在していた米国、ドイツ、豪州はいずれも貿易慣習に於いて公平な国で外国製品と自国製品を差別せず、安くて良いものならどこの国の製品でも受け入れていた。

以上のような状況から、ＴＰＰ協定が締結されても工業製品に関しては日本にとって殆どメリットはないと思う。エネルギーに関してはアメリカがシェールオイルの開発で世界一のエネルギー輸出国になりそうなので供給ソースの多様化の面で日本にもメリットがある。食料品については今よりも安くなり、消費者には大いにメリットがあると思う。食料自給率低下の問題を挙げる人も多いが、今でも日本の食料自給率はカロリーベースで三九％、生産額ベースで六五％（平成二十五年度）なのでこの傾向は止められない。

米国、豪州の牛肉は個人的には十分美味しいと思うが、現状、現地での倍以上の値段でしかスーパーで買えないのは輸入税が異常に高く設定されているためである。問題の農業分野、特に米だが、出来るだけの数量制限を設けた上で関税は下げるべきだが、農家は打撃を受けるので所得補償は続ける必要がある。ＴＰＰを締結しなくても今のままでは日本のコメ農家は先細りなので。株式会社の参入、農産物の輸出（高い米やリンゴが中国に輸出されているそうだ）など、農業の再建は別途考えるべきだ。

私の経験では米国産のコメは日本産の八分の一、豪州産は一〇分の一の価格だが日本人の口には合わず、家庭用には買わなかった。菓子などの工業用であればコストが安くなるだけ日本にもメリットがある。又日本の農産物、特に果物は高いけれども、改良を重ねているだけに大きくて美味で、金持ち階級相手には十分輸出できる。但し日本の農産物は過剰包装の上、サイズも揃えられているのでその分が価格に上乗せされていると思われるが、外国人はこの点は全く気にしないので、規格外製品を輸出に回してもいいかも知れない。ＴＰＰのメンバーではないが中国は十四億の民がいて、そのうち一割（日本の人口より多い）は年収一千万円を超えるらしいので大変な市場である。

最後に過去の日米の政治経済関係から見て、日本政府にはＴＰＰから脱退する選択肢はないのではないかと思う。というのはＴＰＰ参加を決めたのは前の民主党政権であり、これを引き継いだ安倍政権はいまさらＮＯとは言えないからである。ＴＰＰでアメリカに多少譲歩して貰い、集団的自衛権では米国に配慮して八月までの法案成立を約束したのではないか。ところが憲法学者の違憲論もあり八月までに法案は通らないかもしれない。



我々は七面鳥か

下村嘉朝

よくわからないＴＰＰである。秘密にされているからわからなくて当然である。アメリカの多国籍企業の一部の人や政府高官だけが知っている何とも腑に落ちない秘密法案のためである。

アメリカの議員にも日本の議員にも知らされずに進めなければならない秘密とは何なのか？

アメリカの財政がよほど悪くなって破綻寸前になってきているのだろう。なりふり構わず考えた無茶苦茶の盗人まがいの計画ではないだろうか。どんな企業でも永遠ではない。いつかは行き詰まり消えていく運命である。

リーマンショックで金融機関は大損害を被った。それまでもアメリカ経済は不況から脱出できずにいたので破綻覚悟で不良債権を通常債権の中に紛れ込ませ毒入り饅頭にして世界中にばらまいた。

その結果、国際的な金融危機を招き各国が金融支援を行なわなければならなかった。要するに、企業の失敗を国民の税金で消したのである。戦争でも金融危機でも大企業倒産でも最後は税金を使うのである。

では、いまどうしてＴＰＰなのか？リーマンショックのツケがまだ残っているのではないか。しかも、巨額の不良資産が眠っていてアメリカの財政を脅かしている。また年中戦争をしているので軍事

費は際限なく要る。アメリカの製造業は衰退し、儲かる業種は、保険・金融投資・石油などになってしまった。財政危機を救う方策は誰が考えてもない。このままいけば間違いなく国家破綻である。

それで無茶苦茶なことを考え出した。製造業はあきらめ金融で縛り上げ儲けを横取りしようと。お金は血のようにあらゆるところに循環している、その流れを利用して寺銭を巻き上げる。これまで国の行政だった分野にも企業は乗り込んできて寺銭を取っていくだろう。お金のあるところすべてに金を吸い取る網を仕掛けるのである。

こんな事は普通では許されないが、グローバル・スタンダードなどと訳の分からない世界基準を作ろうとしている。要するに多国籍企業が金儲けをやり易くするための方策なのだが、日本の政府も追随している。

もちろんアメリカは世界のボスだから、言う事を聞かないとエライ目に会う。しかしだ、そこを何とかダマしダマし敵の矢を避けながらやるのが外交である。二枚舌三枚舌、おおいに結構。アメリカの無理難題をやり過ごす方策を考えるのが政治家の勤めではないか。

アメリカの言う事を何でも鵜呑みにするのなら、政治家も官僚もいらない。それならいっそのことアメリカの州にしてもらった方がましだ。しかし、州になったら日本語は全て消え去る運命になるしかない。

さて、どうするか?何とか世論を盛り上げて世論を口実にアメリカと渡り合い先送りをするしかない。先になれば状況は変わる。

そのためには、TPP反対の世論を高め沖縄の基地問題、原発再稼働、戦争法案反対へと連動させて、アメリカに危機感を与えるしかない。アメリカもバカじゃない、すべてを失いそうになったら、TPPはとりあえず先送りにするにちがいない。

心ある政治家は、国民の反対運動が全国的に広がるのを願っている。世論が反対に大きく動き出さないと政治家も動けない。黙っていたら事態はわるくなるばかり、少しだけ勇気をだして反対と声をあげましょう。

これは政党・宗派などに関わらず日本に住んでいる人はすべて被害をうけるわけだから、些細なことは棚に上げて団結しないと先祖様や子孫たちに申し訳ができない。

物事はすべて、賛成・反対のバランスが必要なのです。特に、日本のようにアメリカに何事も交渉しなければならない状況では、反対勢力が絶対に要ります。

反対勢力が小さければ、交渉力が生まれずアメリカの言いなりになるからです。反対が圧倒的に多くなってはじめて交渉余地が生まれると思います。日本の外交を後押しするためにも、反対運動をやりましょう。「あかんで!TPPは」と声をかけましょう。

連載◇

「おっちょこチョイぼけ」(28)

――昭和女、どっこい日記――

TPPは気ちがい沙汰、断固反対!…の巻

メールで「TPP特集をやりましょう」と言われて、私は耳を(この場合は耳ではなく目か)疑った。「あの、私、TPPってほんまに何か知らないんですけど」。自慢ではないが、「T」って何の略?「太平洋?」。「P」は?「パートナーシップ」、じゃもう一つの「P」は?「ええっと、わかんない」という、テレビのクイズ番組における、おバカキャラレベル。もちろん、アメリカさんに「もっと農産物を輸入せい」と言われて、農業の人たちが「そんなことされたら死活問題」と猛反対している、ぐらいの認識はあり、自分なりに思っていることはあった。

「TPP、いややな。アメリカから輸入したら、運んでいる間にカビが生えるいうて、防カビ剤とか使うン違うの?。中国の農産物は、お金のある中国人は買わんというてる。そんなもの、いくら安くても、体に悪そう…」

一方で、こうも思っていた。「育ちざかりの子供さんがおったら、少しでも安いモノをたくさん買いたいと思うかもしれん。グローバル社会っていうてる時代に、農産物だけ例外、というのもおかしいのかも。私は個人的にはいややけど」。そう、私はいつだって貧乏人の味方なのだ。もちろん、自分が貧乏人だからである。貧乏ではあるが、「食」にはこだわっている。「おいしいもの」に、ではなく「安心・安全なもの」に。だって、そうでしょう?おかしなものを食べて、体調が悪くなって、働けなくなったらどうすんだ?という話なのだから。

そんなレベルの人間に「TPPについて、何か書け」って、無理あるよね。しかも、こうも言われた。「締め切りまでに進化して」。進化ってダーウィンか?ってボケている場合ではない。

進化を求めて、本屋に向かった。いまどきの人たちは、進化はパソコンですると思うが、私は本屋。難波の旭屋書店。備え付けのパソコンで(ここでもパソコンだ…)検索する。ズラズラーっとTPP関連本の書名は並ぶが、「本のありかは書店員にお問い合わせ下さい」とある。要は置いてないのだ。店員のお姉さんに聞くと、申し訳なさそうに「すみません、少しだけあったような…」と本棚まで案内してくれて、「あ、ここに2冊だけ…」。私は、こんな旭屋が大好きだ。お取り寄せします、などと余計な売り込みをしない。「立ち読みどうぞ」と言わんばかりにそっと立ち去ってくれる配慮。

しかも、2冊もあれば十分だ。まずは、TPPとは何の略だっけ、というところを確認する。「トランス・パシフィック ストラテジック エコノミック パートナーシップ」環太平洋戦略的経済パート

ナーシップ。おお、環太平洋！　太平洋の「T」ではないやろな、とは思っていたが。それに、環太平洋ぐらい聞いたことがある。ド忘れしちゃっていただけだ。さらに、しかも、その本にはこう書いてあった。「ごく一部の限られた人たちによる、政治的、経済的なルールの掌握である」。おおおおお！　これこそ、進化ポイントではないか。

「TPPとはけっして関税撤廃による自由貿易だけの話ではない。多くの国民は情報操作と情報隠ぺいによって『TPP＝輸出がしやすくなって経済が活性化し、輸入品は価格が下がって安く買える』といった程度の理解に留まっている」。

この本一冊、全部写したら、1冊分の紙幅が必要になるので、キモのところだけ。「TPPとは、民主的に選ばれたわけでもないごく一部の人たちが密室で経済の国際統一ルールを作ろうとしているのである」。そうだったのか！　「TPP参加は日本という国を外資に売り渡す行為である。得をすることは一つもない」。けっ。関西人に「得が一つもない」ことが通用するはずないやろ。

「アメリカ人の〇・〇一1%ぐらいの人は潤うかもしれないが、九九・九%の人は搾取される側に回る。アメリカでも、ほんの一握りの大資本家だけが儲かり、大半を占める一般労働者は職を失い、路頭に迷う」。つまり、言い出しっぺのアメリカでさえそうなら、日本なんて千%、潤うわけないってことやんか！

しかもしかもしかも、食も保険も、都合で警察まで蝕まれることになる危険性をはらむらしい。だって、ひとにぎりの大資本家は、自分たちさえ儲かればいいのだから、遺伝子組み換え、乗っ取り何でもアリになっちゃうのだ。警察まで民営化されたら、汚職、ワイロがはびこって治安なんか守れるわけがない。「TPPは単純な自由貿易協定ではない。各国の国内法をも飛び越えて、ごく一部の多国籍企業とその周辺の人たちだけが儲かるようにしてしまおうというものなのだ。問題はそこなのだ」。

だから「芥川だより」でTPP反対を叫びましょう、だったのだ。ここにきて、ようやく進化を遂げた「わたし」。怒りの矛先は、当然、安倍っちに向く。何を考えてンのん、知ってたんでしょ、TPPの何たるかを。「聖域」なんてちょこざいなことを言うて、そんなの通用しないことも。

進化以前の私も心配はしていた。安い米が入れば、きっと田んぼはこれまで以上のスピードで消えていくだろう。そしたら、保水力がなくなって災害に弱い地盤になり、もし、国際的にマズイことが起きたときに日本はパニックになる。「米だけは、食だけは、守らなければならない」。安倍サン、それぐらい宣言せなアカンて！

（AO）

素老人☆よもだ帳（16）

坂本一光

白い米飯（こめめし）

白い米飯が炊きあがる匂い、羽釜のふたを開けたときの色つや、口にするときの甘いような味と香りの感動が五十年以上の時を超えて今でもよみがえることがある。

小学生になった頃の記憶である。私の父は、田舎の郵便局に勤めながら小さな田んぼで米と麦（五枚の田んぼがあり、小麦一枚、大麦四枚だった）をつくり（二毛作）、これまた小さな畑で柿、伊予柑、家で食う野菜などを細々とつくっていた。柿や伊予柑は自家用ではなくわずかな現金収入のために大半を遠い町（松山市）の市場に出していた。夕方自動三輪で農家を回って青果を預かり、翌朝町の市場に持って行って売り、その中から一定の手数料を取る便利屋さんがいたのである。父が売りに出す柿や伊予柑は、味と言い色つや大きさと言い、子ども心にも立派な商品に見えた。売りに出せず自家用にするものでもずいぶんうまかった。

結婚し子どもができて帰省したとき、実に久しぶりに我が家の柿畑の横を通ると、そこには枕を並べて討ち死にしたように、根元から切断された二十数本の柿の木の株が並んでいた。大きな柿の木の下の雑草刈りを夏休みの仕事と言われ汗を流しながら嫌々したこと、たわわに実った柿の実をもいで手と服で磨いて皮ごまかじって食ったうまさなどが走馬灯のようによみがえり、切られた柿の木の株がまるで墓標のように見えた。商品としての柿の木に寿命があることを初めて知った。三十数年も変わらず実を着け続けた柿の木が突然無くなるなどと思いもしなかったことである。不覚にも涙が出た。父を亡くして親にも寿命があることをまざまざと思い知ったのはその後だった。柿と親をいっしょくたにするのも少々よもだが過ぎるとは思うけれども。

さて、白い米飯の話に戻る。父の田んぼは、一反五畝くらいはあったか。その半分は二枚の田んぼで、棚田ではあるが日当たりも良い開けたところにあった。残りは片側が小山で半日しか日が当らず「谷の田」と呼んでいた。小さな三枚の棚田からなり、一枚はもち米をつくる田であった。化学肥料と農薬が普及した後は一反（約十アール）あたりの米の収穫はおよそ十俵（六〇〇キロ）になったというが、私が小学生の頃の我が家の米の収穫は、田んぼに先述の事情もあり、全部合わせて十一俵もあれば大豊作であった。

一人あたりの米の消費量は、昭和三十七年（一九六二）の戦後最高値で約百十八キロである（今はその半分あるかどうか。ちなみに戦前の一人当たり年間消費量は一石すなわち百六十キロ）。我が家は親子七人家族であり、主食中心の当時の

食事では米は絶対的に不足した。結果、二毛作でつくる大麦を一～二割入れた麦飯を食わざるを得なかった。白い米飯を炊くのは、秋の収穫後のお祭りと正月、旧暦四月の桃の節句のときになぜだか毎年母が子ども一人ひとりに花見用の弁当のために巻きずしをつくるとき、それと子どもたちの遠足と年に一回の運動会に持っていく弁当が必要なときだけであった。

第二話に書いたことであるが、食うために働くか働くために食うかなどと思いもせず、飯を食うのは腹が減るからだと素直に感じている子どもにとって、普段の麦飯がまずくて食えないなどと思ったことは一度もない。それどころか、学校から帰ってお櫃を開け冷の麦飯が残っていると大喜びで醤油をかけて食べたものであった。そのうえでのことだが、白い米飯を食べる時は「ご飯」がこんないうまいものかと子ども心にいつも思った。母が「うちももう米飯にしようか」と父に言ったのは昭和三十五年（一九六〇）ころ、私が小学六年生で、日本の高度経済成長がその後の十数年の発展に向けて助走を加速し始めたころであった。

米の減反政策が始まったのは一九七〇年、私はすでに大学生であった。食事の内容が変化し米は余っていたかもしれないが、食料自給率は下がり続けていてカロリーベースで七〇％を切っていた（農林水産省によれば、平成二十五年度（二〇一三）では三十九％！）。うどんを食っていて、このなかで国産はネギと水だけじゃないかなどと会話したことがある。それはさておき、その数年前のころ、東京の大学から戻って農業を継いだ二代目の青年が米作に見切りをつけ自分の田んぼをつぶして畑にし、温州ミカンを植えたことがあった。「ばちあたりなことをして」というのが近隣の大方の者たちの率直な感想であった。しかしそれは、すでに私の町でも小さな丘や小山が見る見る内に開墾されみかんの段々畑になりはじめた頃である。田んぼしか持たず開墾する山もない農家が田んぼにみかんを植えたにすぎない。愛媛県が静岡県や和歌山県を抜いてミカン生産日本一になったのはその何年後であろうか。しかし必ずしも繊維や鉄鋼に続く日米貿易摩擦の品目の一つになったオレンジ自由化のせいだけでないのは明らかだが、みかんだけでやっていける農家なんかここら辺にはもうないよという声を聞くのに十年もかからなかった気がする。みかんがダメになったとみかんのハウス栽培に切り替えても、次々に新種のみかん栽培に切り替えをしてみても、あるいはキウイ畑にしてみても、結局はしばしのその場しのぎの繰り返しのように見えた。

「ＴＰＰ国を開いて国を売る」または「ＴＰＰ国売るために国開く」

『平成の開国』とまで言われたＴＰＰ交渉が大詰めを迎えようとしている、とアメリカ議会の動きやそれを受けての日本政府のコメントが最近報道されている。端的に言って、ＴＰＰに関して国益に反する妥協はしないという国会決議などは、交渉には相手があるということを口実に反故にされそうである。交渉内容は秘密で、実はすでに相当程度の譲歩が行われているのかもしれない。

「瑞穂の国水より安い米作り」と第十話に書いたとおり、ついにこの国の米価はペットボトル入りの水やお茶より安くなった。工業生産の眼で見れば、この国の農業には経営の規模の小ささとか、競争に勝つ農業生産への工夫や研究努力の不足とか、いくらでも日本式家族経営小規模農業の問題点を指摘できるだろう。しかし工業生産的視点で農業を見る者がほとんど指摘しない問題がある。それは何だろう。農業が、国民の健康な生活、極端な場合には生命にかかわるという問題。農業が、人間がつくる自然にかかわって国土を守るという問題。合わせれば、農業が、国と国民の安全保障の問題に、日本に対する他国からの侵略などというおよそあり得ない時代錯誤な仮想問題よりもはるかに深くかかわるという問題である（別の話であるが、この仮想問題について私は「抑止力あの世に行ってもまだ言うか」と言いたい）。その意味で言えば、日本の農業問題は、すぐれて日本の政治問題であるという問題、等々である。

ベトナム戦争たけなわのころ、アメリカの政治学者がベトナム戦争について研究すればするほど、アメリカにとってベトナム戦争がいかに不可避で不可欠な戦争であるかを証明する問題点がベトナムにあることが次々と明らかになったが、彼らが唯一指摘しなかったベトナムにある問題点は、アメリカから遠く離れたベトナムになぜアメリカ軍がいるのかというベトナムにとっての最大の問題点であった、と痛烈に皮肉な指摘をした評論家がいた（たしか、今は亡き加藤周一であったと思う）。

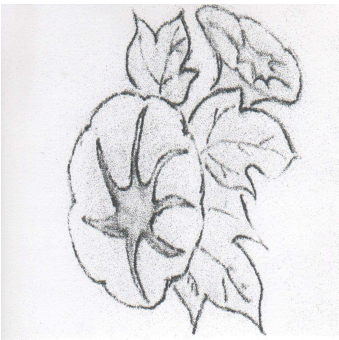
ＴＰＰについて、牛肉を守れ、米を守れ、などと言うのは保護政策に守られて何の努力工夫もしない農業者のたわごとであり、その悪の根源は農協にあるなどという議論をする者は、ベトナム戦争の最大の問題点を見なかったアメリカの政治学者に似ている、と私は思う。日本の農業の問題は、先述のとおり日本の安全保障の問題である。日本の農業をつぶして得られる利益は大企業のその場しのぎの一過性の利益に過ぎないだろう。失うものは国土であり、国民の健康、命であるだろう。輸入ギョーザ毒入り事件や日本マクドナルドの異物混入問題を見ながら、「成長戦略安けりゃ腐れ毒入りも」を実践されては、国民はたまったものではないとつくづく思った。自分たちがつくった白い米飯を食べることができる幸せを有り難いと思った私は、農業や食料の問

題は国の主権の問題であると考える。日本には日本にふさわしい農業の在り方がある、それは他国も同様である。ＴＰＰが扱うのは農業の問題だけではないが、その一点だけを見ても私はＴＰＰ推進に反対する。貿易の自由化？何を言うか、アメリカが他国と対等平等に付き合うなどと考えるのは、日本もそうであるが、アメリカでは民主主義が徹底して実現していると考えるのと同じくらいに幻想である。そんなことは、それが一番の問題ではないと企業が言っていることは承知しているが、あの国の方が人件費は安いとばかりに企業が活動拠点を他国に移すような国が無くなってからにしてほしい。そんな企業はよその国の企業になればいいのである。自国の企業面などするな、と言いたい。

それにしても、最近のこの国の政治を巡る問題は相当に深刻である。根底には政治の劣化、政治家の質の低下がある。それを見過ごした国民の問題でもあるだろう。戦争法案、沖縄の辺野古埋め立て新基地問題、ＴＰＰ問題、原発再稼働問題等々、どの一つをとっても政権が倒れるほどの大問題であると私は思う。しかし、それでも政権は倒れない。まだ倒れないのはやはり国民があまりに物わかりのいい大人になったからなのか。それを成熟と言うなら青臭い方がはるかに人間らしい直感力があると思う。論理的な思考力や分析力などの科学的な力はないよりあった方がいいだろうが、人間らしい直感力はなかったらはた迷惑で困る力である。

違憲、違憲、違憲、息のむ憲法審査会
米軍の後方支援二軍です
この道は破滅への道安倍古道
戦争は徐々に近づきあっと来る
一滴の戦死の涙ない戦後
戦争法辺野古で退陣絵空事
あの世にも米軍基地が要るらしい
一点の偽りもない保守の人
存立危機事態になったメルトダウン
安全を神頼みする再稼働
ＴＰＰ国破れても企業あり
国破れ大企業だけ生き残る
成長戦略売れるものなら魂も
魂まで売る国になったらもうおしまいだ、
と下手な一光川柳も怒っている。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）



闘病記　（28）

梵店主

現実の世界

よっちゃんは、医師の言うことを半分聞くことにしている。医師といえども神や仏ではない、患者の病が今後どうなっていくかなど分からないと思うからである。ただ、医師は研修しているから、病について「研究されてわかっている事、わかっていない事」の境界を知っている。

よっちゃんは、そのへんのところが何もわからない。この違いが素人と専門家との違いなのである。他の分野でも同じだろうが、最先端の研究がどこまでなされ、どこからが不明なのか、その見分けができるのが専門家である。

よっちゃんの病は、多発性筋炎、抗原病の一つで自己免疫疾患である。では、この病気はどこまで研究が進んでいるのか。患者数がまれで研究対象が限られていることや患者が少ないために放置されてきた事情もあるだろう。

しかし、本当の理由は自己免疫という訳のわからない細胞の働きが電子顕微鏡でしか分からないからだろう。よっちゃんが、散歩するコースの横に放射線のマークをつけた建物がある。その中に据え付けられている。大きな装置にちがいない。

担当医に聞くと「私は、一度も見たことがありません。研究者が申請して時間を割り当ててもらい使用しているんだと思います」と言う。それで、担当医をしていてくれた若い女医さんを思い出した。彼女は研究医に進んだから、電子顕微鏡を使って研究しているにちがいない。彼女にお願いして一度みせてもらおう、と思った。

この分野で先駆的な研究者である教授は、回診の時に言っていた。四つある細胞の変化を三つまで解明できたあと一つ解明できれば薬がつくれる。アメリカではすでに治験薬をつくり出した、と。

「あと五年、おそくて十年で何とかなる。それまで元気で生きてください」と言った。

ほんとか、ウソか知らないが研究が進んでいるのは確かだろう。しかし、よっちゃんは、考えるのである。十万人に一人という病気の薬を作っても商売にならないだろう。莫大な研究費を使って新薬を作っても元がとれない。新薬を作るのに十年、百億から二百億の金がいるらしい。これまでは、風薬や胃薬といった需要の多いわりと作りやすい薬だったから儲かったが、これからは難しい病気の新薬になるから研究費はかかる。

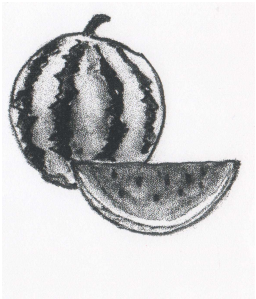
よっちゃんが、製薬会社の経営者であれば、わるいけど、よっちゃんのようなまれな病の新薬はつくらないだろう。採算が合わないからだ。そんな事を考えて、よっちゃんは、期待をせずにおこうと考えた。

ほとんど解明されていない病気はたくさんある。同じ病気でも個人差がある。よっちゃんのように病名がついただけでもありがたい。病名がつけられないと治療も始まらない。何でもいいから病名をつけてもらうことだ。もちろん誤診は困るが、ある部分は仕方がない。

病名がつかないと入院も出来ず保険も使えない。最初に病名をつけてくれた医師は「五年後、十年後、あなたの冷凍保存された血液検査でまったく違った病名がつくかもしれませんが、いいですか」と聞いたことがある。

わからないから何もしない方がいいのか、よくはわからないがとにかく手探りでやってみる道を選ぶのか。医師たちはこちらの選択をせざるを得ない。よっちゃんは、人の身体は複雑で病気という異変を治すのは大変でわからないところだらけなんだと思った。

これまで、医師にかかればすべてわかるのではないかという幻想があったが、そうではなかった。それで、よっちゃんは、医師に対して過剰で盲目的な期待はしないことにしたのである。



世界一周旅行記（14）

若山哲郎

ナスカで見えナイス

この世界一周の旅は主に南半球のそれも南側を巡るので正確には世界の全地域を制覇するのではないので全世界というわけではないのですが、それでも百五日間かけて十四カ国、十七の都市を西回りでぐるっと一周します。アジア大陸、アフリカ大陸に続いて南アメリカ大陸に辿り二月二十八日はいよいよ南米最後の国、ペルーのカヤオという港に着きました。百日間あまりとはいえ船旅ですので旅程のほとんどの時間は船上で費やされます。ですから各都市の滞在は大体一日が基本でした。さてここに来て船はめずらしく四日間ここに停泊します。

カヤオは首都リマの西部に隣接する国内最大の港町です。そして本日はお待ちかね、ナスカの地上絵を見に行きます。船が四日停泊している間、皆、ばらばらの行動をするのですが、多いのはナスカ、マチュピチュコースです。私もここまで来れば関心がなくても見に行かなければならないという妙な切迫感に苛まされました。というわけでリマをバスで通過しましたが途中の景色は南米の他の国々とは少し違っていました。ペルーは少し前大使館人質事件があったように民族テロが多発していてそれまでアンデスの奥地に住んでいた人々が追われてリマ近郊に移り不法占拠のまま住んでいます。雨がほとんど降らないため簡単な家でも住めるということから屋根もろくにない日干し煉瓦造りやトタン屋根の掘っ立て小屋がほとんどです。貧しさは昔も今も変わりません。

一九五三年、チェ・ゲバラは大学卒業の二十五日後、友人のカルロス・フェレルとともにベノスアイレスから南米放浪の旅に出ます。J・D・ペロンの独裁政権下のアルゼンチンを離れて、ボリビア革命の進むボリビアを旅した際に、それまで虐げられてきたインディオが解放され、かつてないほど自由な雰囲気が漂っているのに大きな衝撃を受けました。その後ペルー、エクアドル、パナマ、コスタリカ、ニカラグア、ホンジュラス、エルサルバドルを旅行し、グアテマラに行き着いた。グアテマラで医師を続ける最中、祖国のペルーを追われ、グアテマラに亡命していた女性活動家のイルダ・ガデアと出会い、共鳴し、社会主義に目覚め、急速にのめりこんで行くとともに、彼女と結婚し革命家になりました。

そのゲバラがモーターサイクルで走ったパン・アメリカン・ハイウエイをバスで南下すること四時間、途中はすべて砂漠です。ピスコという町にたどり着きここから軽飛行機でナスカの絵を見に行きます。読者の皆様と同じく私もナスカというところはテレビや雑誌などでよく見るために一応は知っていますがその歴史や文明のことまで詳しくは知りません。起源前後から八百年くらいまで栄えた文明であるくらいで地上絵もなんの目的で書かれたのかもはっきりわかりません。しかし、あまりにもその地上絵が有名なためわかったつもりになっているのでしょう。今もその程度です。そんな知識のまま田舎の小さな飛行場からセスナで飛び立ちました。定員は十名未満、こんな小さな飛行機って大丈夫なの、少し不安になりました。でもまだナスカ遊覧飛行で墜落事故があったなんて聞いたことありませんから一応変に安心。でも私たちが事故第一号になったらどうしょう、などと考えながら三十分も飛びました。地上はすべて砂漠。そしたら急にペルー人のパイロットが変な日本語でクジラって叫びました。ここまで観光にくる日本人はやはり多いのでしょう。飛行機は大きく旋回。左右の席から均等に見えるようサービス飛行するのです。言われた方向を見ました。けれどただの砂漠の砂の跡しか見られません。この辺りは雨が全く降らない地域なためそこら中が乾いた砂模様だらけ。見えない、どうしょう、焦りました。数分後またパイロットが〝うちゅーじん〟。わっ、また見えない。他の人はワーと感嘆の声。どうしょう、このまま私だけ見えなければ、帰ってどう

皆様に言い訳すればよいのか。見えていなかったのに見て来たと嘘を言えばいいのか。心の底で、悪魔が囁きました。どうせ誰にもわからない、誤魔化せと。不安は高まるばかり。次オウム、あっ、何か見えた。決定的なのは次のフラミンゴから。有難う、やっと見えました。何故見えなかったのか。それは地上絵が想像以上に小さかったこと。最初のクジラは六十三メートル。高度六百メートル位から見れば小さなもの。小学校のグランドの五十メートル走のラインを飛行機から見ているようなもの、パッと見分かりません。

そして決定的なのは刷り込み。すでに雑誌などの写真のイメージがありました。あれらの写真は修正の可能性大です。あと飛行する時刻や天候にも左右されるそうな。時には全く見えない場合もあるとか。先にそれ言って欲しかった。しかし、やっと見えたという安堵で涙がこぼれそうになりました。よし、これからはなんでも来い、しっかり見てやるからと思ったら〝サンキュー皆さん〟。おいおいもう帰るの。たったの三十分、それも左右片側交互だから正味十五分。それからまた三十分かけて砂漠の上をガタガタ、エンジン音ブンブンで帰りました。デジカメで写真はたくさん撮りましたが、ほとんどは砂漠ばかりで何があるのか判明できませんでした。

本当、行ってみなけりゃ分からない。私達は最上のコンディションでの情報に慣れきってしまっているのをつくづく感じました。今夜の宿は何故か、砂漠の中の高級リゾートホテル、ダブルツリー・ヒルトン・パラカス。綺麗な娘さんがプールにいました。何故か、ホッとしました。

ペルー二日目、二十九日は朝ピスコのホテルを出発しパラカス国立公園行きました。パラカスというのは地図上ではナスカの北になります。昨日私たちはリマーピスコ-パラカス-ナスカの順で南下して来てまた北上したわけです。さて、そのパラカスはプレインカ文明の一つになります。全て砂漠地域になりますが土器などが発見されています。海に近く拡大な景観が広がっています。さて本日はゆっくりと公園を見学し、またリマ市内へ戻って来ました。途中サッカーのフーリガンに遭遇しました。整然と行進する集団もいましたが、一部は暴れてポリスに追われていました。お陰で今夜はメインの繁華街へは出ることができませんでした。どの国でも迷惑な集団はいるものです。サッカーはスポーツではなく格闘技なのですね、不満層のはけ口になっているのかも。いよいよ明日はハイライト、マチュピチュ。日本人に一番人気のある世界遺産、さてどんなところかお楽しみに。

大人の今昔物語（12）

石川吾郎

今回は、この物語の中でも綺談中の綺談。私がこの表題に「大人の」と付けている理由の一つでもあります。教科書にはまず出ないでしょうから、教科書に出ない度は五／五。

旅の男の蕪の使用法とその顛末

（巻二十六ノ二）

今は昔、京から東(あずま)の方に下る者がいた。どの国のどこの郡(こおり)とは詳らかでないのだが、一つの村を通っているときに、急に性欲が勃々と沸き起こり、物狂おしく、女の事で頭が一杯になってしまった。心を静めることができず、このままでは済みそうにないと考えあぐねているうちに、見ると通りの脇の垣根の内側に勢いよく青菜が茂っていた。十月(現在の十一月)ころだったので、蕪(かぶら)が大きく育っていた。この男、これを見るとすぐに馬から飛び降り、一本の大きな蕪を引き抜き、それに穴を彫って、その中に淫をなし(射精し)てしまった。事が終るとすぐ、その蕪を垣根の中へ投げ入れて、何事もなかったように行き過ぎていった。

その後、この畑の持ち主が青菜を収穫するために、下女たちを大勢連れて、また幼い女の子たちも連れてその畑にくりだした。そこで青菜を収穫している間に、十四五才ばかりの、まだ男を全くしらない女の子が青菜を引いているうちに、垣根の辺りで遊び回っていたが、例の男が投げ入れた蕪を見つけ、「ここに穴のあいた蕪があるわ。これは何でしょう」などと言って、もてあそんでいるうちに、萎びてきたところを削って食べてしまった。そうこうするうちに、収穫も終わり、みながそろって帰っていった。

その後この女の子は、何となく大義そうな様子になり、食事もとらず、気分が悪そうになってきたので、両親が「どうしたことだ」と心配して騒いでいたが、そのまま月日がたってくると、何と妊娠していたことが明らかになってきた。父母は非常に驚いて、「一体何をしたんだ」と女の子を問い詰めるが、「私は男には少しも近づいたことはないの。ただ心当たりのことは、しかじかの日に、しかじかの蕪を見つけて食べたことがあったわ。その日から気分が普段とちがってきて、こんなになったの」と言う。しかし父母は了解できないことなので、この言葉をたいしたこととは思わずに聞き流していた。家の従者などに事情を聞きただしたが「男が近くに寄っていたということも全く心当たりがございません」と答えるだけだった。不思議に思ったがそのまま月日が経過し、月が満ちて可愛らしい男の子が無事に産まれた。

＊　＊

その後、どうこう言っても仕様のない

ことなので、父母はこの子供を育てていた。そうこうするうちに、例の東に下った男が任国に何年か住んで後、また都に上ってくる途上、家来を大勢引き連れて、その畑の所を行き過ぎようとする時、ちょうど十月のころだったので、この女の子の父母がかつてと同じように、青菜を収穫しようと、使用人を引き連れてこの畑にいたのだった。この男は、件の垣根のあたりを過ぎようとして、人と話をしていたが、声高に言ったものだった。

「おおそうだ。先年東国へ下るとき、ちょうどここを通りかかったとき、無性に女が欲しくなってがまんできなくなった。この垣根に入り込んで、大きな蕪を一つ引き抜き、穴をくり抜いてその穴の中でやってしまい、すっきりしてそいつを垣根の中に投げ込んでおいたことがあったなあ。」というのを、この母が垣根の内側で確かに聞きつけ、娘の言ったことに思いあたり、垣根の内から出てきて「何とおっしゃる！何とおっしゃる！」と、詰問する。男はてっきり「蕪を盗んだ」と言って咎められているのだと思って、「冗談ですよ」と、ただ言い訳をして逃げようとするが、母は「ぜひともお聞きしたい重大なことがありますので、どうぞ教えてくだされませ」と、泣くばかりに言うので、この男、何か事情があるのだろうと思い、「何も包み隠すようなことではありません。また私にとっても大変な咎を犯したというわけでもないはず。ただ生身の凡人に過ぎないので、こんなことをしたまでのこと。単に雑談のついでに話したものです。」

母はこれを聞いて涙を流し、泣きながらこの男を引っ張って家に連れていこうとするので、男も不審には思ったが、強引に連れて行かれるまま、家までいった。

その時に、女はこれまでの事情を語り、「こんなわけですので、その子供をあなたさまに引き合わそうと存じますので」と言って、その子を連れてくるので男が見ると、自分に瓜二つであった。これには男も驚き心を打たれ、「うーむ、こんな不思議な運命もあることよ。それにしても、私はどうしたものでしょう」と言う。女は「こうなれば、あなたさまのお心一つでございます」と、この子の母親を呼び出して男に会わせると、身分は低いものの結構美しい女であった。年齢は二十歳ばかりのようであった。その子も五六歳ほどで、大層かわいらしい男の子であった。これを見て男が考えるに「自分が都に帰ったとしても、両親も、頼れる親類もこれといってない。ただこれほどの深い運命的な因縁があることだ。とすれば、この女を妻にしてここに留まることにしよう。」と、真剣に考えを巡らした。やがてその女を娶り、この地に生活をすることになった。

＊　＊

これは、まことに珍しい話である。こんなわけで、男と女はまぐあいをせずとも、身中に淫(精液)が入れば、このように子供ができるのだと、語り伝えているということだ。

《コメント》

この話しは、男の生理事情についての深い洞察に基づいていて、男の身としては身につまされる思いがしてしまうのです。冒頭の内容がかなりきわどいものなのに下品にならず、ポルノグラフィーと一線を画しているのは、人の性の充足がそれだけで終らずに、その人の人生そのものに大きくかかわって、ついには人生を大きく変えるものとなる、という真実を語っているからでしょう。

主人公の男の態度の変化、最初の軽いノリから、物事を真剣に考えるという態度の変化は、打算ばかりではなく運命に従おうとする人間の姿を見る思いで、一種感動すら覚えます。

結語は、相変わらずのおとぼけぶりで、これはこれなりに楽しませてくれます。しかし現代の科学常識から考えて、その内容は性についての素朴で妄想的な誤解に基づいているといえます。

哲学屋のつぶやき（13）

哲学の起源、ギリシャを旅する

祖蔵　哲

六月の初旬、ギリシャを巡ってきた。若い頃は一人旅がもっぱらでしたがさすがに定年を過ぎて家にいることが多くなると家内の苦労も少しは分かってくる。いまさら罪滅ぼしではないが一緒に旅することにした。哲学を専門にしてきたとは言え、哲学世界は広し。一般には西欧哲学と東洋哲学といわれる地域にわけられるが東洋ではインド哲学と日本哲学が主である。西洋はさすが哲学の本場であるが現在の国で分けるとドイツ哲学、フランス哲学、イギリス哲学が主である。小生は残念ながら日本哲学が専門であるので外国への留学経験はない。多くの哲学研究者が行くのは現在もドイツが中心である。日本ではデカルト由来のフランス哲学合理主義よりも、カントをはじめとするドイツ観念論のほうに人気があるらしい。フランス哲学は実存主義をはじめとして人間自身の内底を思い図るが、ドイツ哲学はプラトンのイデア以来の精神的実在を扱う。日本人もどちらかといえば精神的文化を好むためこちらの方に興味を覚える傾向があるのかもしれない。

さて言うまでもなく哲学とは西欧で生まれた学問である。日本には明治期に西周(あまね)により哲学という訳で紹介された、比較的新しい学問である。中江兆民など

は「わが日本、古より今にいたるまで哲学なし」と言ってきたが日本哲学を専門にする私から言わせればそんなことはない。空海や親鸞、道元などの宗教家は立派な哲学者であると思う。デカルトやカントでさえ日本では関が原の戦い以後の人である。それ以前に人間とは何かを考えている人がいたのである。日本も決して哲学後進国ではない。そんな哲学であるがその起源はやはり古代ギリシャである。

夜十一時、関空から飛行機は飛び立った。十一時間の長時間フライトでカタールのドーハで乗り継ぎ、さらに四時間やっとアテネに着いた。当地では翌日の昼十二時であったが時差があるので実際に体内時計は夕方六時である。さすがにこれだけ長く飛行機に乗ると正直疲れる。当然エコノミークラスであるので座席が狭い、フルリクライニングにはならないため十分な睡眠はとれない。飛行機の騒音と緊張感で神経も磨り減る。しかし今回の旅は家内と一緒なのでなんもかもがセットされたパッケージツアーであるので時差ボケしている暇はない。次々にスケジュールをこなさなければならない。すぐにアテネ市内へ入り、国会議事堂の衛兵交替を見学し、オリンピックスタジアムへ。このスタジアムは前回のアテネオリンピックの時に使用された古代の競技場を模したオープンな施設。オリンピックと言えば最近、次期東京オリンピックの新国立競技場の建築費が問題になっているがそれに比べれば百分の一程度の施設。東京は驚くなかれ二千五百億円。ギリシャの期限が過ぎたＪＭＦ償還金額二千億円よりも高い。いかに東京オリンピックがコンパクトな大会といっていかさま演出し招致をしたかが分かる。しかし今更新聞が問題にしてももう遅い。あの時期、マスコミを上げてオリンピックムードを作ったのだから。あれ程もう箱物経済の時代ではないと言っていたのに。現代オリンピックは今や負の遺産となっている。

さてアテネの観光のメインはなんといってもアクロポリスのパルテノン神殿である。現地ガイドも世界ナンバーワン世界遺産であると誇らしげに紹介している。私も哲学者の端くれ、古代ギリシャの哲学者達に思いを馳せ彼らも通ったであろう大理石の階段を登っていた。途中には円形劇場の跡とかはるかにアゴラの森が見渡せた。アゴラとは市場というギリシャ語であるが市民が集まって議論をした広場である。かのソクラテスもあそこで市民達をつかまえては議論をしかけていたかと思うと想像の翼はだんだんと広がってくる。登りきったところが文字通りアクロ、一番高い所にたつパルテノン神殿です。ドーリア式という飾り気の一番少ない中膨れの柱に支えられた神殿は本来その梁にも多くの飾りがあるのですがそのほとんどは外国にもちさられているか、破壊されている。いまもギリシャは大英博物館に返還請求をしているのだとか。そして石造建築といっても二五〇〇年も経過すれば老朽も進みます。いたるところで修理中の仮設足場が組んである。

しかし何処をみても仕事をしている人はいない。ギリシャはシエスタという昼寝の習慣があるため昼は四時頃まで仕事を休むとのこと。ギリシャ人は古代より働くことを嫌い、暇（スコラー）を愛した人たちだ。労働は奴隷がするものでそのためにはかれらは戦いに明け暮れた。そして戦いのない時にはひたすら議論し考えたのだ。これも古代哲学の起源のひとつである。

しかし今は経済的な事情で工事がストップしている。アテネで一番高いところに作られた神殿、ここからはアテネの全てが見渡すことが出来きる。町は赤い屋根の小さな家でいっぱい。さすがここは観光都市のため建築制限は厳しくビルも二五〇メートル以上は許可されない。だから高層ビルは一切ない。そして道路は狭く、その上路上駐車がすさまじいので交通停滞は日常茶飯事のこと。丘を降りてバスで今夜のホテルに向かうバスも渋滞に巻き込まれた。ホテルはアテネの中心部にあり外出には便利なところなのだが如何せん疲れている。夕食後すぐにベッドに入った。ギリシャの食事といっても対岸のトルコの影響があるのか串焼きといった肉料理が中心。野菜は極端にすくなくジャガイモと人参のオリーブオイルフライといった脂っこいものだ。また、野菜類は保存を考えてか塩漬けにしたものもあり私達の味覚にはあまり合わない。たまに食べるのには良いかもしれないが毎日このような食事であればストレスが溜まり、また高血圧などの症状も出てくるだろう。

さて、次の日は、これも朝早くバスに乗り込み高速道路を北上しそして西方へ八十キロ程、ペロポネソス半島の付け根、コリントスに向かった。コリントスはキリスト教の伝道者パウロが布教を始めた町としても有名であり、今は十九世紀に作られた半島の根元を横切る運河がある。ここからさらにバスで四十キロ南下するとミケーネの古代遺跡だ。ミケーネ文明は、紀元前一五〇〇年頃に地中海交易によって発展しクレタ島に侵攻しミノア文明を征服したと考えられてる。トロイ戦争で勝利したが紀元前一一〇〇年頃、突如勃興した海の民によって崩壊したと言われている。ドイツ人実業家シュリーマンによって発見されて英国人考古学者エヴァンスによってクレタ文明の文字解析から地中海文明の興亡が明らかになってきた。特にシュリーマンは学者ではないのにギリシャ神話への興味からトロイの実在を信じ、ついに発見するなどロマンに満ちた活躍をしている。しかし遺産の私物化等マイナスの評価もあるのだが当時の帝国主義という時代的背景もあれば

仕方がないのかも。ミケーネは現在はかなり内陸に位置しているが当時はすぐ近くに港があったとか。その後海面が下降し陸が出てきたのだ。現在地球は温暖化であり、今度は逆転して海面が上昇するといわれているがこれもはっきりした学説ではないようだ。

ミケーネ遺跡を見学する前に隣接する博物館でガイドが遺跡見学のポイントを説明していた。どうもそれは想像力を使うことらしいだ。なぜなら現地の遺跡は文字通り遺跡であり建物の礎石やその跡の穴だったりする。実際の建物をそこから想像して頭の中で復元しないとただの石ころや穴ぼこを見ているだけということになる。この説明は案外私たちが忘れている事で示唆に富んだ指摘だなと妙に感心した。というのはアテネに到着以来ずっと古代遺跡ばかり見続けており、疲れもあるのかだんだんと遺跡がただの石ころに見え始めてきたから。とはいえ現地の遺跡に行くと外気温三十五度、湿度は低いとはいえ暑さで頭がぼーっとしてくる。蜃気楼で古代の建物が見えそうな気分になる。

さて、その日はまた元来た道をアテネにもどり昨日と同じホテルに泊まって翌日はエーゲ海クルーズだ。実をいうとエーゲ海クルーズは日本人の憧れかもしれないが、なにしろ船はスピードが遅く短期間に観光をするのには適していない。しかし最近のギリシャツアーは必ずこのクルーズが組み込まれている。人気があるのと旅行会社も現地の船会社丸投げであれば手間も省けて楽なのだろう。その分、ギリシャ本土の観光が短くなる。学問肌の私としてはクルーズは余計なのですが、家内としては外せない。アテネ近くのピレウス港に着くと港には大きなクルーズ船が二三隻停泊していた。大体四万トンくらいで一五〇〇人位が乗船できる。コースは一日ショートクルーズから数日間までタイプがあり、私たちは四日間のクルーズにした。乗船するとパスポートを預け救命訓練が早速実施される。最近船の遭難事故が多いので皆神妙になって参加していた。船の食事はバイキングかアラカルトといってミニコース料理の２つスタイルを自由に選べる。食事代はクルーズ料金に込みなのでどこで食べてもよいのだが比較的美味しいアラカルトはレストランでサービスされテーブル席に係員が案内するため少人数で行くと欧米人と顔を合わせなければならないため緊張して嫌だという人もいた。私は少々英語も話せるので良い機会だと思い時々行ったが、話せるとはいえ流暢ではないので苦労する分食事に気が回らなくなり後半には気楽なバイキングで食べた。やはり日本人はまだまだ西欧式社交は苦手だ。因みにこのクルーズ、やはり八割以上が欧米人で一割弱が日本人で中国からは意外に少なく日本人の半分位だった。最近発生したＭＥＲＳの影響なのか韓国からの人はほとんど見かけない。ギリシャのクルーズはその日数によって訪れる箇所が決まっている。四日コースではミコノス島、トルコのクシャダス、パトモス島、クレタ島、そしてサントリーニ島の五箇所。大体、一日に二箇所に停泊する。下船してその地の観光は自由行動だが別料金でオプショナルツアーが設定されている。欧米人も一緒なので英語ガイドのところもあるが一定の数が集まると日本語のガイドも付く。

さてもう少しクルーズの様子も紹介したいのだが紙面が限られている。哲学が本筋であるので以下は簡単にまとめる。クルーズでの遺跡はトルコのクシャダス近郊のエフェソスでアルテミス神殿をクレタ島ではクノッソス宮殿跡を見ることが出来る。ミコノス島では迷路の町並みをパトモス島では聖ヨハネが黙示録を書いたとされる洞窟を、そしてサントリーニ島ではおなじみ青い屋根と白い壁の家の町が見られる。クルーズを終了し、再びアテネに戻りギリシャ本土を北上、デルフィの信託で有名な神殿遺跡に行き、更に次の日も北上しメテオラというところで世にも奇怪な岩山群を見た。驚いたのはその狭いそそり立った岩山の頂上に修道院が立てられていたことである。この地の険しい地形は、俗世との関わりを断ち瞑想と祈りに生きるギリシャ正教の修道士にとっては理想の環境と見なされ、九世紀には既に、この奇岩群に穿たれた洞穴や岩の裂け目に修道士が住み着いていたらしい。今は道路が整備され近くまでバスで行き階段を登って修道院を見学することができるが当時はそれこそ命がけの暮らしであったろう。そんな昔の修行者の思いを跡に再びアテネに向け南下。飛行場から乗り継ぎを入れておよそ二十時間のフライトで日本に戻ってきた。十日間のギリシャ旅行であった。最後は駆け足の旅行記になってしまったがこの旅行もまた駆け足の旅であった。

テーマに戻ろう。現在の文明の起源であるギリシャ文明、自然科学そしてそれを支える西欧哲学はなぜギリシャに生まれたのか。紀元前五〇〇〇年エーゲ海にはミコノス島、サントリーニ島などのキクラデス諸島に新石器文明が生まれ、紀元前二五〇〇年頃にはクレタ文明が、そして紀元前一五〇〇年頃ギリシャ本土にミケーネ文明が栄えた。これらの文明はエジプト文明やメソポタミア文明の影響も受け文字もあった。地中海交易で自由都市国家を形成され文化の調和、融合が積極的に行われる。そして、ある時期北方から温暖な土地を求めバルカン半島を南下してきた農耕民族と言われるアーリア人によって民族的融合も進んだ。アーリア人はこの土地に定着し様々な文化に触れ、突然哲学的思考に目覚めたと考えられる。都市国家が形成されペルシャ戦争に勝利したアテネの最盛期に哲学が生まれた。ソクラテス、プラトンは紀元前

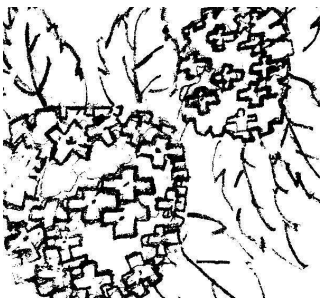
五世紀頃であり、その頃日本では弥生時代、人々は竪穴式住居で暮らしていた。卑弥呼が現れたのは紀元後三世紀である。これだけの時間的な文明の差があるのは様々な原因があるのであろう。

まずひとつは絶え間のない戦争が人間の思考を発達させたことが考えられる。少人数の争いをするのには戦術レベルの思考でよいが集団での戦いでは長期的な戦略というものが必要になる。そして大きな組織を動かすために正確な文字や言語も必要となる。戦争に勝つためには正義、善や徳が問われ、戦争に勝てば奴隷を獲得でき、そして日常の労働から解放されて考える暇ができる。戦いで死んだ人や、明日自分が死ぬかもしれないといった人間の運命や無常を考えたのであろう。旅をしていても感じたがギリシャは地中海気候で温暖であるが土地は豊かではない。山には木が少なく、火山岩が多い。そんな地域でありわずかにすめる箇所を巡り争いが絶えなかったのであろう。

二つ目はその政治体制である。よく知られているように民主主義デモクラシーの起源はギリシャである。ギリシャの民主主義はもちろん現在のそれとは大きく異なる。女性や奴隷は勿論参加できないし全員といっても少人数の一定の資産のある市民が直接話し合い政治をするものである。卑近な例えであるが、町内会の話し合いのようなものである。ギリシャがこの制度を選んだのは貴族政治という世襲では考えが固定していまいそして市民の団結力が生まれないため戦争に勝てなかった。そこで皆で話し合い納得する意見がまとまれば団結力が増し戦争にたやすく勝てたこと。古代の戦争はまだ奴隷や傭兵の参加はなかったようだ。そしてこの話し合いで皆を説得するためには弁論術が必要であり論理的に考え説明する必要がある。これが哲学の始まりの要素にもなった。東洋的専制政治体制では強制的な命令のもと人々はただロボットのように動くだけ自ら考えることはない。ここに西欧的思考との相違がある。

そして三つ目の要素が宗教的な環境ではなかったかと考える。一神教の影響である。ギリシャ神話は神々が沢山登場し一見多神教のように見えるがゼウスを最高神とする立派な一神教である。なぜ一神教が哲学に影響をあたえるのか。それは最高神が世界を創造したとされるからである。人間を含めてあらゆる存在物を神の意思で作ったということは、それらの存在物を知ることが神の意思を知ることになるという理屈である。東洋的な多神教の世界では世界はすでに自ずから在った（自然）のでありそれを究明することはなかった。ここに哲学の生まれる環境の違いがあったのであろう。自然科学と哲学はいつもセットである。アリストテレスによると最初の哲学者はイオニアのタレスである。彼は万物の根源を水と考えた。また日食も予言したという。立派な科学者である。なぜ現代文明をささえる自然科学が西欧で発達し東洋では生まれなかったか。今回の旅ではその謎が少し解けたような気がする。

最後に、旅行の前、近しい人にギリシャに行くというと必ず危ない国だから止めたほうがよいと言われた。なるほど経済危機の最中にあり、さも治安が悪いだろうと思っていたが案外平穏であった。七月になって銀行の閉鎖などの事態になって混乱しはじめたがこれからどうなるのであろう心配である。ヨーロッパの人々はギリシャを自分たちの文明の故郷であると今も思っている。しかし実態は古代ギリシャ崩壊後様々な国々の侵略にあい、また植民地化され民族の混入があり、もとのギリシャ人は途絶えている。あの聡明な古代からのギリシャ人がこのような状態になるとはと嘆くのはもっともであるが歴史は非業なのである。しかし今のギリシャも人々は陽気で親切、遺産を大切にする立派な国です。伝統ある思慮でこの危機を乗り越えることを切に祈る。



サラリーマン渡世譚（26）

明石幸次郎

引き継ぎ

N君が待っていた電話は、一時半になってやっと掛かってきた。「大商社は良いですね。昼休みは1時半過ぎ迄ですか？処で、明日、午後一時半からは、I課長、Oさんは、会社におられますか？勿論、Kさん、貴方も！」とN君はイライラしながら、M商事のKさんから掛かってきた電話に、皮肉を交え、要件を伝えた。

「昼休みは12時から一時までですが、メーカーさんみたいにきっちりと十二時からは取れません。世界を相手にしている商社は、日本が昼休みなど関係なしに、急ぎの電話は掛かって来ます。丁度、12時半にダッカから電話が掛かって来たので話をしていたら、一時前になり、今、食事から帰って来たら処です。Nさんから急ぎの電話と言うので今掛けましたが、Nさん、何をイラつかれて、皮肉を言われるんですか？ご存じの様にダッカとの時差は三時間半です。現地オフィスが九時始まりで、現地スタッフはそれよりも早く入って、緊急の電話なり、書類に目を通し、英語に訳しています。現地のAから例の件で、十二時半に電話があったんです。言っときますが、のんびりと食事をとっていたんではないですよ。」と反撃を食らった。「分かりました。Kさんも

偶には忙しい時もあるんですね？処で、明日の一時半からの予定は如何なんですか？明日、その件で、Mと今度、工場から転勤で来たOと三人でお伺いしたいんだが」と少し冷静になって、用件を伝えた。Kさんは「少し待ってください」と言って、上司の予定を確認した。N君はその間、イライラしながら貧乏ゆすりをして、Mさんを意識しながら、返事を待った。Mさんは、N君にアポの時間は十時半にして貰え、それが駄目なら一時半や、と指示をした。「Nさん、午前中でしたら、三人ともおりますが、大阪から来られるとしたら、何時ごろですか？」という事で、N君は十時半に伺うので、対応策を話し合いたいと念押しして、Kさん相手にしては、珍しく短い会話で受話器を置いた。Mさんは即、「おーい、N。入札価格をどの位下げれるのか、計算して、限界利益はどれ位取れるのか？納期は最短で何か月で船積み出来るのか？特に納期はS工場の生産管理課のうるさいリーダーに根回ししておけよ！」と指示を出した。N君は「Mさん、昨日も工場に行って話をして来ましたが、管理課も生産管理課も短納期で、しかも採算が赤字すれすれ、そんな案件は受注しても工場に何ら貢献しないので、上司とよく相談して断る方向で進めてくれ、と言われました。それは、A課長には報告してます」と答えた。Mさんは、自分は、初耳のため、「N、そんなこと言われて、君はどう答えたのや」と明石を挟んで議論となったので、明石はN君と席を替わろうと立ち上がり、自席にN君を座らせた。

「私としては、採算がマイナスで無い限り、受注して、市場は確保すべきと思っています。工場が何と言おうが、仕事を取らないと工場の稼働率が下がるので、全体の採算も悪くなりますよね。個別案件で見れば確かに採算は悪いが、台数が5千台以上となると、稼動率を上げるのに貢献します。私は、工場に行けば、貧乏神みたいに思われていると思いますが。ねえ、明石さん、この前まで、工場におられ、この関係の部品を担当されていたので、どう思われてましたか？」と明石の方に顔を向け、意見を求めてきた。Mさんも明石がどう反応するかを覗っている目つきをした。明石は暫く考えて「私はお互い輸出部と工場とは立場が違うので意見は夫々違うけど、工場の経験から言って、採算は別にして、定期発注外の短納期が一番堪えますね。しかも、バングラとか、イラン向けは量が多いので部品会社の工程が混乱して、いつも嫌がられてます。もし事前に何らかの情報があれば、プレ・インフォメーションとして知らせておけば、受ける側の気持ちの問題と、少しでも前もって生産準備が出来て、対応がしやすくなると思います。生産管理課は、短納期対応は、製造部と資材、購買部から突き上げられるので、その見返りとしてN君に嫌味を言ったり、厳しく当たるので、君の存在は工場の関係者は皆知ってるよ。有名人や。私は来たばかりで偉そうなことは、言えませんが、営業は仕事を取ることで存在があると思います。採算が良い事に越したことはないが、仕事の確保を優先すべきでN君がやってることは、それで意義があるし、間違っていないと思う」と応えたら、N君は、にっこりと笑い「明石さん、工場出身の人にしては、珍しく営業の立場を理解されて、味方が出来て本当に嬉しいですよ。昼メシの阿弥陀くじに負けて良かったです」と最後は冗談でかえされた。Mさんは明石の話に反応して「明石、俺らは、工場と話をする時は、生産管理課とか、工務課の窓口の人としか話が出来ないが、相当突っ込んだ情報を伝えているのになぁ。現場サイドには、中々伝わっていないのやなぁー。窓口のKさん、Iさん、Hさん等の情報に対する感性の問題やなぁー」と言いながら、「この会社は、社内営業の方が大事やなぁ、それがひとつボタンを掛け違えば、俺みたいに担当を外される」とため息交じりに明石に向って話をしたが、明石は明日の出張の事の方が気になっていた。

年中行事という言葉

大江雉兎

六月末の茅の輪くぐりと夏越の祓、七月になるとコンビニやスーパーに七夕の笹飾りが目立つようになり、そのうち祇園囃子が喧しく……と立て続けに大きなイベントが続く。あえてイベントとカタカナ表記したのは、これらが注目されるのは観光目線での紹介や集客的な文脈があってのことだからである。そして、言うまでもないが、これらの本来の姿はそんな思惑とは関係のない話、暦の上に刻まれた指標、すなわち年中行事である。今回は、この年中行事がお題になるのだが、何かの行事を紹介するのではない。年中行事という言葉についてあれこれやってみようと思っているのである。

小学校の頃だったろうか、国語のテストで「一年の決まった時期に行われる行事を何といいますか」という出題に出くわしたことがある。正解は「年中行事」だったのだが、その当時は答えることができなかった。それ以前に、設問の意味さえも理解できなかった。「～行事を何といいますか」だから、お盆とかクリスマスとかいった具体的な行事名を挙げねばならないとでも思ったのだろう。今から思えば、教材の一節に「年中行事」という言葉が出ていて、覚えるべき言葉として強調されていたのかも知れない。だが

思考の焦点はその方向で切り結ばれることはなかった。

この一件は、子どもの頃によくある些細な勘違いと言ってしまえば、まったくその通りだ。しかし、ほんの少し立ち止まることができていれば、大きな問題をのぞき見ることにもなったはずである。それが語構成への意識付けである。

「年中行事」という言葉は、見ての通り四文字の漢字で構成される四字熟語である。では四字熟語の語構成という視点からみるとどうなるだろう。

主客転倒：主客が転倒すること
問題提起：問題を提起すること
新規開拓：新規に開拓すること
既定条件：既定の条件
枝葉末節：枝葉と末節
快刀乱麻：長い言葉の省略形

等々、四字熟語は二字熟語のさまざまなパターンによる重ね合わせによって作られる。そこで「年中行事」だが、果たして年中・行事という分解は妥当なのだろうか。もし妥当なら「年中」と「行事」はどんな関係にあるのか。修飾と被修飾の関係と考えるのが普通かと思うが、その場合の「年中」の意味はどうか。「年中無休」や「年中、愚痴ばかり」といった〝一年間とおしてずっと〟の意味で使われる「年中」との整合性はあるのか。

ここまで来ると年中・行事という分解には課題があるのがわかるはずだ。「年中行事」を〝一年の決まった時期に行われる行事〟と説明するのなら〝一年の決まった時期〟の部分を担うのが「年中」でなければならない。しかし「年中」に対して〝一年間の決まった時期〟という説明を付ける辞書など存在しない。もとより単独用法での「年中」にはそんな意味はないのだから。ということは「年中行事」の「年中」は、単独の「年中」とは別物であって「年中行事」も二字＋二字に分解できる複合語ではないと考えるべきなのだろうか。

だがこれに類するケースは思い当たらない。一見すれば二文字ずつに分解できる四字熟語なのに、いざ分解すると前半または後半、あるいは両方が単独での用法と変わってくる言葉である。類例が見当たらないのは「年中行事」は日本語の中でも特殊な言葉ということなのか。そんな言葉が一つぐらいあっても面白いので食指も動くところなのだが、類例がないのなら、視点を変えてみるのも大切である。〝一年の決まった時期に行われる行事〟という説明を疑うのである。

こういう説明のせいで「年中」が浮いているのなら、その前提を崩してしまえというわけだ。「年中」の説明には〝一年の間〟というものがある。元旦から大晦日までの期間ということだが、その説明に引きつけると「年中行事」を〝暦の上に配置された行事〟と説明することが可能になり、対置される「臨時」という儀式用語も重みを持ってくる。元来は宮廷儀式の分類で使われていた言葉だったことも併せると説得力も出てこよう。要するに「年中行事」とは〝一年の間に行われることが予め決まっている行事〟の謂いであり、時期が固定している点は、少なくとも語義的には重要ではない。そして条件が揃った時にだけ催される臨時行事と区別する意識から用いられた言葉とも言い添えておく。この説明なら年中・行事との分解にも問題がなくなると思うのだが、是か非かこれ奈何。

ところで、子どもの頃に遭遇した年中行事事件にはもう一つエピソードが加わる。答案が返却された時、こんなのわかるワケない！とかなり激しく不満をこぼしたのだが、それに対して教師は困惑した雰囲気だった。その国語教師にしてみれば、ありふれた設問とありふれた解答のつもりだったろうから、こいつは何をそんなにごねているんだ？と思ったのかも知れない。子どもの頭なので、問題の所在も曖昧で、何が不満なのかも伝えられなかったと思うが、設問と正解の間に埋めようのないギャップを感じていたのは事実である。

しつこく噛みついてくる子どもに対しては、少しだけでも手を差し伸べてもらいたかった。言ってしまえばそのあたりが本音なのである。ほかの業務が忙しかったのか、徳育の方面が欠如していたのか、それとも単純に能力の限界だったのか、教師からは素っ気ないスルーが返されただけだった。今となっては何もわからないので、教師の側にも事情があって無視だったと考えているのだが、教職という高みから正解なるものを仰せ下すだけだったとすれば、いかがなものだろう。加えてそれが指導要領そのほかマニュアルの無批判な垂れ流しだったとすれば。何十年か後になって年中行事という言葉に対して粘着質になったのは、こんな経験があったからなのかも知れない。

編集後記

うっとうしい天気が続き気分も晴れません。今月号は、ＴＰＰを特集しました。耳慣れない言葉の方も多いかもしれませんが、知れば知るほどエライ条約です。黙って鵜呑みにするわけにはいきません。

先日、アメリカのオバマさんが「ＴＰＰは、アメリカの国民と企業に都合の良いように貿易基準を書き換える法案である」とテレビで言っていたが、最近、何かと無理難題が多いアメリカです。

もうそろそろ食べごろに太ってきたと考えているのかも、イヤですよ、七面鳥じゃないもの。（嘉）

連載 女９０年の軌跡 眞糀さん

生まれるもの

ペンで字が生まれる。
歩いていたら何かが生まれる。
歩けば歩くほど、思いが生まれる。
考えれば、考えるほど、文がまとまる。
やっと、ふとんで寝てたら、今日の終わりがある。
そして、あしたが生まれる。

あがた祭りに想う

鬼も十八、番茶も出花。
女性もお茶も盛りの頃は香り立つ。
年頃の娘になれば、それなりに若々しく美しい。
又、番茶でもいれ立ては、香りが良くて美味しい。
何にも女性に対してのみ、鬼とは許しがたい。
今となっては、その言葉に味がある。
宇治市に一歩踏み込むと新茶の匂いでいっぱい。
いろんな神事があり、あちこちで白装束の人達が忙しそうに。今年は雨天でさっぱり。県神社で手を合わせて、私流のやり方で香りを十分に楽しみ、興聖寺へと参る。

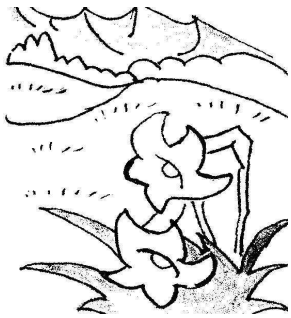
子供の頃

農繁休暇があり、学校が一週間休みとなる。子守り、田んぼへのごはん運び。
　茶つみとなれば大変、茶の木を囲んで一葉、一葉、新茶をつむ。時には大きなムカデに出会って、ときの声をあげたり、毛虫が茶の木にのさばっていたり、今おもいだしても大変。
「こびるにしょうか」母の声。ヤレヤレ、まだまだ続く茶の木を見ながら、ため息ばかり。「口ばかり動かしてんと、手を動かしや」と母の声。
実家から新茶が届くと、まず開封するまでに両手を合わせて「ありがとう」と声が出る。「初物、新茶」七十五日の諺があるように、寿命がのびて長生き出来る、と考えられ縁起が良いといわれる。清新な匂いをかぎながら「もったいない」と語りかけている自分がここにある。

母の日

今日は母の日、花屋さんの店頭はすべてカーネーションで埋まっている。目的の本を物色中、私は思わず立ち読みを始めていた。
店員さんが何回もそばに来られるので「なんで、忙しそうに来るの？」と内心腹を立てながら、ハッと自分に気づいた。立ち読みはダメだった。頭の中に詰め込んだのをあわてて書き出してみた。「命の授業」あいうえおの「あい」から。
「あい」愛に通じる。すべての始まりに愛がある。私達は両親が愛で結ばれて、その愛に包まれて生まれてきた」その通り。母や女性にちなむ字をもう少し思い出してみよう。「始」の字は、女偏に「台」。命は女性という土台から生まれている。
すべての命は女から生まれる、女から始まる。なるほど、心があたたかくなるぞ。五十音を人の一生に重ねると「愛」で始まり「恩」で終る。
いくつになっても親への恩返しはむずかしい。「お花を届けに参りました」という声に「ハッ」と我に返り、そうだ、今日は母の日。息子からの贈りもの「お母さん、ありがとう」その一言でいいんです。

俳句

土田　裕

つかの間の
　庭手入れにも汗滂沱
汗にじむ人の行き交ふ坂の街
紅ほのと昔伝える古代蓮
青芝を
　赤シャツが行くゴルフ場
職退きし
　無聊にも慣れ藤寝椅子